

現代の政治と文化（要旨）

南 原 繁

この一篇は、一九六二年度、斎藤 勇記念學術講演会において南原 繁先生の行われた講演の要旨である。ここに、再録の機会に恵まれたことは同慶の至りであろう。ただし、これは記録にもとづく要旨であり、文責は一切記者にあることをお断りしておきたい。

現代、特に今次大戦後の日本の政治と文化について考える時、それはそのまま世界の問題に直結して切離すことはできない。

およそ、この二十世紀ほど政治・文化・経済の紛糾した、歴史の変動の激しい時代はかつてないのであるが、その原因は、必ずしも政治・経済それ自体にあるのではなく、より根本的な問題があると思われる。具体的に言うなら、それは、我々が営々と築いて来た、そしてその中に現在我々自身が生活している、この文明そのものの中に問題があるということである。即ち現代文明の特徴は、巨大な機械文明・技術文明にあるのであって、産業革命以後の驚くべき幾多の発明・発見は人間生活・社会機構を一変し、更に第二次大戦後の航空機の発達、ついで原子力の発達から宇宙時代へと進み、我々は今その絶頂にあると言ってもよいであろう。

しかるに、この偉大な自然科学の功績により、もたらされた文明・文化の発達の半面、我々は一つの大きな問題に直面した。それは *scientism* 即ち科学万能ということ、自然科学が近代の学問として他のすべての学問・知識に優位し、他はそれを模範として自然科学的方法を採用したことである。その結果は知らず知らず唯物的に傾かざるを

得ない。かくの如く物質を取扱う經驗的な学問が王座を占めて、我々の物の考え方を機械論的に導くところに、特長と共にまた別な問題をはらむのである。その最大なものは、本来自由な精神の主体たるべき人間自身の存在が危くなつたことである。すなわち人間自身が、せっかく築き上げた文明の蔭にその道具となるのは未だしも、その文明によって脅かされ破滅もしかねないという、極限まで押し迫られた矛盾である。

すなわち、近代文明を支配し、なお無限に発達しつつある自然科学の将来は、想像もつかないほどであるが、近代科学は余りに専門化し技術化し分化した結果、知識相互の連関・全体としての目的理念を見失ってしまった。その故にこそ、近代文明の発達の頂点とも見られるこの二十世紀において、未だ人類の歴史にかつてなかつた大戦を二度までも敢えて戦つたのではなかつたか。近代に至つて如何にも文明は進歩したが、言葉の正しい意味においての文化は没落したと、われわれは言いたいのである。

しからば、近代文明を如何にして正しい位置に戻し、世界の危機を救うべきかというならば、それは正しい意味における文化を立て直し、それによって人間自身を回復し、その自主性を取りもどすことにある。従つて、先に述べたような現代文明の唯物的傾向に対して、これは新しい *humanism* の精神の強調といふことができよう。

このことについての根本問題は哲学にあるが、手近な問題としては、日本のみでなく戦後の世界に共通の一現象として、大学教育において専門的知識のほかに人間教育すなわちいわゆる教養 (*culture*) が採り入れられ、重要視されていることで、これは、近代文明の弊害に対する人類の一つの救済方法を示すものと言えるであろう。ところが、この教養の世界を見出した人間が、総合的・普遍的立場から、個々の知識ならぬいわゆる人生の知恵を求めて人間自身を内から築いてゆこうと努力する時、再び大問題に当面せざるをえないのである。これは哲学者カントの言つたように、人間が人間である限り避けがたい根本悪・人間悪の問題で、これを克服し、解決するためには、人間の知識・能力を超えた絶対者に到達せざるをえない。これが即ち正しい意味における宗教の世界である。しかるにこの宗教の世界は、不幸にも近代文明と自然科学の発達に伴ない、その特徴として、いわゆる科学的実験によつて証明されないものは存在しないとして、否定される傾向にある。しかし、いうまでもなく、宗教と自然科学とは存在する次元を異に

するもので、公平に科学する人、学問するほどの人ならば、少なくともかのゲーテのごとく、実験を以て認識し得ない問題の前には、畏敬の念をもって立ち停まるべきではなからうか。

この宗教に対する否定的な考え方には二通りある。その一は近代の生んだドイツの思想家ニーチェが、歐洲キリスト教世界の只中において叫んだ、「神は死んだ」という言葉に始まり、その系統を引く現代流行の哲学の主流は実存哲学 (existentialism) である。それは、要するに、不安と苦悩の哲学、ニヒリズムに通ずる現代の知識人にふさわしい哲学と称していいであろう。今一つはフォイエルバッハに始まるマルクス、エンゲルスの社会思想で、彼らの唯物史観の考え方からするならば、すべての社会文明は、経済的・物質的生産力の発展の上に築かれるのであって、宗教のごときは、当時の封建的・奴隸的・社会経済構造の上にこしらえ上げられたものとして、否定し去っている。このように、社会思想と哲学の主流が、いずれも宗教に否定ないし無関心の態度を取っていることには、近代宗教もその責任の一半を負うべきものがある。その余りにも制度化し、形式化し、または余りに迷信化し、ご利益宗教と化して、無力になった点において、マルクス主義あるいはソ連式の無神論にさえ、一応取り組む必要があると思うのである。その上で現代の問題として、この近代文化の中に真の宗教の占める正しい位置を把握すべきことが究極の問題として残されている。

以上述べた宗教・道徳・文化・教養等は、言うまでもなく人間内面の精神的事業であって、各個人は何よりも自己を内面から築き上げ、まず自己自身の完成に向って努力するということは根本の問題である。しかし、問題はそこに止まることを許さない。内面から新しく築き上げられた人間は、必ずや外に向って、時代の問題と対決することを要求されるのである。これが一般に社会の問題、とくにマルクスの提供した社会主義の問題であって、内面的精神生活と同時に、物質的社會の中に生きる我々にとっての大きな問題である。近代文明を今日ここまで発展させたのは資本主義の功績であろうが、その文明のために人間が機械となり、労働者が商品となったところに、資本主義の欠陥をつき、社会的正義の旗を高く掲げたのがマルクスで、我々はそこに歴史的意義を認めないわけにはゆかない。

その意味において第一次大戦後のロシア革命による共産主義社會の出現と、第二次大戦後同様に、東洋に共産主義

中国の出現したことは、すこぶる重要であり、この二つの事件は、良くも悪しくも、人類の大きな一つの実験ともいふべきものである。しかし、ソ連はレーニンの革命以来四十年、共産主義政治の下に、資本主義体制に取って代った新しい社会主義体制は、少くとも一まず完成したと見ることができよう。一方中国は、革命後わずか十年を経たに過ぎないが、私の見るところ、この新しい中国社会の基盤はもはや確立したと言っているであろう。ことに中国で今日の如く人民のための人民の政治が行われるようになったのは、共産主義政治が敷かれて後のことである。

ここで考えたいことは、この二つの世界は、先に述べた大きな社会問題の解決を目指しているのであるが、世界の社会的・歴史的条件によって問題は必ずしも同一ではないということである。そこで今日の世界を見渡したところ、マルクスの提起した問題を他の方法によって、すなわち共産主義に対抗して解決しようと努力しているのが、列国のまじめな政治家の態度である。

例えば、英国は戦後、福祉国家(welfare state)を造った。当時労働党内閣の首領であったアトリー氏の言葉によれば、英国の社会主義はマルクスの影響を受けてはいるが、そのイデオロギーは英国の伝統の上に立つ、自由の精神と humanism であるということであった。日本で社会主義という直ちにマルクス主義を考えるが、社会主義には理想主義的社会主義もあってしかるべきであり、また現にあるのである。また印度のネル首相からも聞いたのであるが、彼の社会主義もマルクスのそれではなく、印度伝統の思想の上に立って、印度固有の社会主義国家を実現しようとしているのである。かくのごとく、いずれの国といえどもそれとの対決を免れないところの時代の問題にまでこれを高め、世界を動かした点においてマルクスの功績は大きい。

しかし、我々は、これらの意義を認めた上で、マルクス主義になおかつ大きな問題と欠陥があるということに、盲目であってはならない。根本的な問題は、結局、ものの考え方である。すなわち、彼の唯物史観の立場から、世界の歴史を進展させるものは物質であり、経済的・物質的生産力の弁証法的発展によって社会と歴史がつくられるという考え方に立ち、人類を搾取階級と被搾取階級との真二つに引き裂き、階級闘争によって新しい理想社会を作り出すとした点である。それは一つの考え方として認めるにしても、その致命的欠陥は、彼らの思想を国家的権力によって

公認し、他を許さず、従って学説・思想の自由がないことである。私が先年ソ連国内を旅行中見聞したところでも、マルクス以外の研究は、わずかに批判の対象としてのみ許されている有様であった。ソ連では、自然科学の発達は偉大であっても、芸術・宗教等人文科学の分野における力は弱いのである。

しかも、そのソ連において、五年前の第二十回共産党大会において、フルシチョフ首相はスターリンの思想・政策を否定したのである。してみれば、彼らがスターリンを否定した次に来るべきものとして、レーニン、マルクスにその批判が及ぶのも遠い将来ではないように思われるのである。

ここに至って、我々社会科学に興味を持つほどの者は、マルクスと取り組み、更にマルクスを超えて社会的真理の発見にと進むべきである。これは社会学徒に課せられた、時代の大問題である。しかも、単なる経済学・社会学のみ問題ではなく、根本的には哲学・世界観・宗教・道徳等を含めて深く人生観に関する問題である。

以上述べて来たような新しい文化、あるいはその基盤となるべき良き社会を作るために必要な条件は、自由と平和である。自由のないところに真の文化はなく、平和のないところに福祉国家は成立しない。ヘーゲルの歴史哲学の立場は、人類の歴史を自由の理念の発展であると規定している。封建社会から近代国家へ、君主や貴族の自由から万民の自由へと発展し来たことは、確かに歴史的事実である。しかし、ヘーゲルによれば国家と国家、民族と民族との関係は世界歴史が決定するのであり、結局その時代の優れた民族が勝ち残り、戦争というものが国家間の問題の最後の決定者となるのである。

実に戦争と平和は人類の歴史において繰り返され、その交替が歴史の現実であった。しかるに、二十世紀に入って始めて人類は、戦争か平和か二者択一のスローガンを掲げ、第一次大戦において、また第二次大戦において、戦争に終止符を打つべく戦ったのである。

しかして、第二次大戦後、世界の状況は一変した。原子爆弾・水素爆弾の発明は、従来の戦争の概念を一変してしまった。今日米ソ両国の保有する原子爆弾の量は真に恐るべきものである。今度こそ一度戦争が起ったなら人類は破滅するであろう。正に戦争か平和か、ぎりぎりの関頭に立たされているのである。ひとり米ソ両大国のみならず、他

の小中国の共に考えなければならぬ、人類全体の理性と決意の問題である。

この問題について我が日本は如何であろうか。私は、たまたま日米知的交流委員会の招きで昨秋来日された、ハーバード大学の社会学者リースマン教授と、日本の平和問題について話しあう機会があった。同博士が、当時英字新聞に掲載された自衛隊の某将校の、戦争を謳歌するが如き言辞について、私の考えを問われたのに対し、私は、五味川純平の小説「人間の条件」を紹介して、この小説がベストセラーを続け、多くの青年に愛読されている事実を指摘し同博士の憂慮されるような一面も今日未だ残っているけれども、とくに青年学徒の間には大勢において戦争は否定されていくことを説いたのである。この「人間の条件」は、正に古い軍隊生活と戦争の間の絶対の場を生き抜いて、ついに最後を遂げた一人の人間に象徴されたヒューマニズムを描いた作品の一つであり、私は、そのような心強い現象が今日の青年学徒にあることを信ずるものである。

しかし、他方に映画や小説において、いわゆる「戦争もの」が氾濫しているのも事実である。ここに現代の政治と文化について今一度立ち帰って言うならば、先に述べたように、現代の科学と技術は政治の道具となり、冷戦のために動員されている。否、今や自然科学・技術のみならず、文学・芸術等のすべてが好戦的宣伝のために利用せられ、その本質を曲げられている。サルトルが文化の非武装化を叫ぶゆえんである。しかも、その場合、彼らは国家・国民・民族の名において文化の擁護を叫ぶのである。しかし、文化(culture)はすべて人間によって人間のために創られるべきものである。従って、根本においては、人間の自由な活動を前提とし、その相互の協力によって創られるもので、国境を越え民族を越えた或る普遍的なものが目指されており、人類共同の事業である。決して国家権力によって政治家や軍人の作りうべきものではなく、また作るべきでもないのである。政治はすべからず、その文化を国民大衆のものとするための社会的環境・条件を整え、経済的基盤を作る使命を有する。現在、世界の危機に際し、何にもまさって人間の自由と平和の保障は、政治中の政治問題でなければならぬ。

たまたま昨今キューバ事件が勃発して、世界を大きな混乱におとし入れた。米ソそれぞれの立場はあろうとも、基地は本来キューバにもトルコにも撤去されることが望ましい。問題解決の衝に当たっている国際連合の任務は極めて重

大である。ある者は昨今の世界情勢を見て、歴史はまたもや逆転し、平和の到来は望みなしとする。しかし、我々は、三年前の国連総会においてソ連が、また昨今米国が、フルシチョフ、ケネディーの名において、世界の完全軍縮を提案していることに注目すべきである。これは歴史始まって以来かかってなかった事実である。それが達成するまでにはなお多くの迂余曲折を経なければならぬであろうが、人類の歴史の動向は既に定まっている。この意味において、特に非武装の新憲法を有するわが日本としては、この歴史の動向に沿い、一旦掲げた非武装の旗はあくまで守り抜き東西両陣営の間に立って人類の平和をはかることこそ、日本民族の新しい使命ではなからうか。道は決して平坦であるとは限らないが、いやしくも、学問の、あるいは文化の何たるかを知りえた者として、真理に対する畏敬と情熱と勇気をもち、又まことの愛国心を以て、茨の道を切り開いて行かなければならない。それでこそ、この時代に生を受けた我らにとり、真に価値ある人生であると同時に、自由と平和の新らしい祖国日本の国造りに寄与することができるであろう。